

有意義な雑談

安藤紳次

あなたが通学する大学のイメージは？

受験前はオープンキャンパスに参加したり、大学案内を見て、その輪郭を把握したはず。ところが、入学後の学生生活では大学のイメージを特段考える必要がなかった。

しかし、就活シーズンになると学生より先に採用側の企業（団体）が大学のイメージを固めてゆく。こう書くと「それは偏差値か」と早トチリする人が多い。しかし、日常の企業活動は一般的に想像するより遙かに複雑・専門化し、偏差値だけでは越えられぬハードルがある。

私は以前、京都の伝統品産業で人事の担当をしていた。そこで見た外大生のイメージは有り体に言えば、総合力評価で殆ど差がないということ。言葉を換えると、外大生A・Bさんが応募してきたと仮定しよう。外大生はその学力、面接等による総合評価値がある範囲内に収まるということ。こう書けば、また早合点組が“極めて平凡な可もなく不可もない学生”と思うだろう。しかし、詳しく見ると、

Aさん……学力は優れているが、面接での元氣不足。

Bさん……学力は今一歩だが面接での爽やかさではピカイチ。

ざっとこんな様子である。

結論を言えば、Aさん、Bさん、どちらを採用しても入社後に大きな差は生じない。就業開始後、暫くは採用試験時の印象が続く。

これは内緒の話だが、私が面接時に質問するのは次のような内容である。

- 今日、あなたはどのような質問を受けると想定してきましたか。（志望動機です。）
- では、その質問に教えてください。
- あなたは今度、まだ一度も関西へ来たことのない小学生の修学旅行を京都で待ち受け、案内することになりました。案内先は京都市、大阪市、神戸市の各市1ヶ所、計3ヶ所と決められています。それぞれ三都市のどこへ引率しますか。

引率先と、それを選んだ理由は。

2問目は簡単そうに見えるが、正解のない質問ゆえ、物事の決定と要因をいかに簡潔に伝えられるかを試されている。（企業で必須の能力）「役員秘書」を務めた、貴方たち外大生の先輩は、このような質問にも当意即妙に対応し実力の片鱗を見せていた。

面接は「言葉の蓄積」を多く持っているほど有利だ。私は、それを大きくする源は読書とラジオニュースを聞くことであると思う。

読書は著者への共感と反論を反芻し、論理的思考回路の形成作用を重ねる。

ラジオニュースは映像がない分、短い言葉で複雑な内容を伝える工夫がなされている。例えばこんなニュース。「関係者がシアンを作成しました。」ここでのシアンは次のどれか考えてみる。

私案、思案、シアン（化学物質）、試案。メモをとって、どれに該当するか考えてみる。煩わしいがこうした繰り返しが国語力を向上させ、それに比例し専門性へと導いてくれる。

上記の例ではたいていの場合、アナウンサーはこう言うだろう。「シアン、試みの案を……」聞き手を安心させる。

外大生の面接には何度か立ち会ったが、他大学の学生より読書量がやや多いと感じた。その理由は、質問に答える中で専門的な内容を一般的な事例に言葉を置き換え、面接担当者を納得させていた。つまり、言葉の変換技術力が見えたからである。

大学の雰囲気や「学風」といったらいいのか。ともかく、学生から学風を感じさせる希有な学校が京都外大である。その大学で学ぶ学生は、より謙虚になって自負心を持つべきであるし、学生に教育サービスを提供する教職員の方々も更なる精進を積むべきであると思う。

生きることは学ぶこと。その中枢を担う大学という組織は、何と素晴らしい空間か。

あんど う しんじ（アマチュア写真家）